目次

序章　ノイズという〈現場〉　川那部保明
——ジャコメッティ「模写についてのノート」から……1

第I部　芸術と市民社会

第一章　「市民社会」の中の絵画　谷田　博幸
——一九世紀英国のナラティヴ・ペインティング
はじめに……16
一　「ナラティヴ・ペインティング」とは何か？……17
二　ナラティヴ・ペインティングを読む……23
おわりに——「市民社会」の中の絵画……42

第二章　「叫び」から「微笑み」へ　山口恵里子
——フランシス・ベイコンの描いた身体を市民社会が抱擁するということ
はじめに……48
一　肉の叫び……52
二　見えないものに向かって叫ぶ……60
三　叫びの一方向性——箱の中の孤独……63
四　口から吐く叫び——腹わたの反乱……68

五　エロスの叫び――身体の歪曲 …… 71
六　椅子が開く日常（市民社会）の裂け目 …… 75
七　木の架台――肉の儀礼 …… 79
おわりに――痛みと微笑み …… 82

第三章　インドモダンのアレゴリーと瞑想する卵

――リムゾン《話す石たち》のプリミティヴィズム

内山田　康

はじめに …… 97
一　話す石たち …… 99
二　フィールド …… 103
三　植民地モダンから、もう一つのモダンへ …… 110
四　植民地モダン …… 116
五　モダンへの希望と喪失 …… 119
六　そしてインドモダンの職人様式？ …… 121
七　中空をもった形への関心 …… 122
おわりに …… 128

第四章　メディウムと幻視の共同体

吉野　修

はじめに …… 137
一　メディウムと幻視される共同体 …… 140
二　暗闇のレッスン …… 142
三　顔の剝奪と顕現 …… 150

四　イメージ・多様性としての「群れ」……154
おわりに――「私は感じる」のブラウン運動……161

第Ⅱ部　市民社会とインターネット

第五章　情報社会の中の「天譴」論――日本的「非合理主義」とメディア観・社会観・プライヴァシー観の関連について　仲田　誠
一　二一世紀日本と天譴論……168
二　天譴論の系譜……172
三　天譴論と日本的世界観……179
四　天譴論とメディア観・社会観……183
五　「誠実さ」と「プライヴァシー意識」・「公と私の意識」……188
六　結　語……193

第六章　市民エンパワーメントとメディア利用　海後　宗男
はじめに……198
一　市民にとって、どのようなメディア・リテラシーが必要なのか……200
二　メディア・リテラシーの目標の再考……201
三　市民エンパワーメントにとって必要なリテラシーとは？……202
四　情報の発信・受信と市民エンパワーメント……210
五　情報環境の変化とメディア・リテラシー教育……214

第七章　情報社会の倫理　ラファエル・カプーロ（仲田誠訳）
——比較文化論的試み
はじめに……219
一　「極西」における直接的・間接的語りの伝統……222
二　「極東」における直接的語りと間接的語りの伝統……231
三　展　望……241

第八章　電子ネットワーク上で自己を物語る　田村　貴紀
——ウェブ日記を題材に
一　自己を語る場としての電子ネットワーク……249
二　南条あや——言えない言葉と解釈共同体——……253
三　結　び……272

第Ⅲ部　歴史の中のマイノリティ

第九章　歴史の中のイスラームとスペイン市民社会　宮﨑　和夫
——グラナダ奪取祭の変容
一　グラナダ奪取祭……278
二　征服の日の出来事……279
三　儀礼の制度化と衰退……280
四　自己主張を始めた「イスラーム・スペイン」……283
五　「テロとの戦い」と奪取祭……288

第一〇章　市民社会におけるヒターノ　久野　聖子
——自立、選択、そして市民社会参加
はじめに……300
一　伝統的共同体から市民社会へ……301
二　ヒターノ社会における伝統的共同体と近年の変化……306
三　ヒターノ女性の市民社会への参加……309
おわりに……313

第一一章　「共同体異分子」の処遇　マルティン・グーゼ（畔上泰治編・訳）
——ドイツの更生保護教育史における「少年保護収容所」の問題
はじめに……319
一　「強制保護収容」……320
二　「少年保護収容所」（少年強制収容所）の成立……323
三　収容された少年少女たち——検束理由……326
四　少年保護収容所の管理システム——日常生活……327
おわりに——ある職域で活動していた人々の共同責任に関して……338

第一二章　有害メディアからの少年保護　ペートラ・マイアー（畔上泰治訳・註）
——ドイツ連邦共和国少年有害メディア審査機関
はじめに……348
一　連邦審査機関の歴史と目的……349
二　連邦審査機関の委員会と審査の特徴……350

三　「少年有害メディア」認定の基準……355
四　「少年有害メディア」認定の効力……358
五　「少年有害メディアリスト」……359
六　「少年有害メディアリスト」からの削除……361
おわりに……362

第Ⅳ部　一八世紀ドイツの市民的公共性と社交性

第一三章　クニッゲと啓蒙の社交性　笠原　賢介
——カントとシュライアーマッハーとの連関の中で
はじめに……366
一　社交の世紀としての一八世紀……367
二　カントにおける啓蒙と社交性……369
三　クニッゲと『人間交際術』……376
四　むすびにかえて——シュライアーマッハーとクニッゲ……386

第一四章　一八世紀ドイツの文芸的公共性の一特徴　濱田　真
——J・G・ヘルダーにおける作家と読者の位置づけの問題を中心に
はじめに……398
一　文芸的公共圏における匿名性の問題——ヘルダーの『近代ドイツ文学断想』……399
二　ヘルダーの『批評の森』における作者と読者の関係……404
三　一八世紀文芸的公共圏における読者の位置……407

第一五章　『若いヴェルターの悩み』とドイツ一八世紀の市民　武井　隆道
——ノルベルト・エリアスの理論をもとに
はじめに——ドイツとフランス一八世紀の「市民概念」……414
一　ヴェルターにおける「市民」の言説……416
二　一八世紀ドイツの「市民」——エリアスの理論と『若いヴェルターの悩み』……419
三　『ヴェルター』における「編み合わせ」……425
四　結　論……430

第一六章　初期ロマン派における社交性と文芸的公共性と秘教性　中井　章子
——ノヴァーリスを中心として
はじめに……433
一　理性と理性の外のもの——啓蒙と初期ロマン派……436
二　イェーナの初期ロマン派……439
三　初期ロマン派における「社交性」と社交性理論……442
四　文芸的公共性と秘教性……444
おわりに……446

第V部　〈啓蒙〉の可能性と市民社会の夢

第一七章　孤独な散歩者は市民社会の夢を見るか？　佐藤　淳二
——〈啓蒙〉と「自己への配慮」
一　〈啓蒙〉・ダイヤグラム・市民社会……450

二　カントとボードレール（アヴェック）……452
三　人口の「統治」――国家と社会のテクノロジー……457
四　自己の技法と『エミール』の不透明性……461
五　市民社会あるいはテクノロジーに関する孤独な夢……464

第一八章　フーコーによるネオリベラリズム
――『生政治の誕生』をめぐって　佐藤　嘉幸
はじめに……470
一　ポスト・フォーディズム的統治性？……471
二　ネオリベラリズムとは何か……474
三　人的資本としての主体……480
結論に代えて……483

第一九章　エートスの製作（ポイエーシス）としての「生の技法（ビオス）」
――フーコーとデリダによる「みずからに死を与える主体」の行為論　廣瀬　浩司
はじめに……487
一　行為論としての生の権力論……488
二　晩年のフーコーにおける主体の問題……493
三　デリダ――「死の瞬間」とその「絆なき絆」……502
おわりに……507

Chapitre 20　**L'expérience de l'*instant* : J.-J. Rousseau ou la scène originaire de la modernité**　Junji SATO
L'impossibilité de l'origine et la logique de la scène ……14 (525)
Thématique de l'*instant* : Du ‹Lévite d'Ephraïm› au ‹Contrat social› ……17 (522)
L'*instant* comme une expérience de l'impossible ……20 (519)
Conclusion ……24 (515)

Chapitre 21　**Marguerite Duras : communauté des amants, communauté à deux**　Osamu HAYASHI
CONTRE L'ŒDIPE ……2 (537)
AMOUR ……7 (532)
COMMUNAUTÉ ? ……10 (529)

あとがき ……540

執筆者・翻訳者一覧 ……542

凡例

註および参考文献における文献の表記は、各論文の専門分野および使用言語の慣習に従った。